アラスカとの出会い (1)

星野 道夫

十代の頃、北海道の自然に強くひかれていた。その当時読んだ、さまざまな本の影響があったのだろう。あの頃、北海道は僕にとって遠い土地だった。北方への憧れは、いつしかさらに遠いアラスカへと移っていった。だが、現実には何の手がかりもなく、気持ちが募るだけであった。二十年以上も前、アラスカに関する本など日本では皆無だったのだ。

ある日、東京、神田の古本屋街の洋書専門店で、一冊のアラスカの写真集を見つけた。たくさんの洋書が並ぶ棚で、どうしてその本に目が留められたのだろう。まるで僕がやって来るのを待っていたかのように、目の前にあったのである。それからは、学校へ行くときも、どこへ出かけるときも、かばんの中にその写真集が入っていた。①手あかにまみれるほど本を読むとは、ああいうことをいうのだろう。もっとも僕の場合は、ひたすら写真を見ていただけなのだが。

その中に、どうしても気になる一枚の写真があった。本を手にするたび、どうしてもそのページを開かないと気が済まないのだ。それは、北極圏のあるイヌイットの村を空から撮った写真だった。

灰色のベーリング海、どんよりと沈む空、雲間からすだれのように差し込む太陽、その中でぽつんと点のようにたたずむイヌイットの集落……。初めは、その写真のもつ光の不思議さにひきつけられたのかもしれない。そのうちに、僕はだんだんその村が気にかかり始めていった。

なぜ、こんな②地の果てのような場所に人が暮らさなければならないのか。それは、実に荒涼とした風景だった。人影はないが、一つ一つの家の形がはっきりと見える。いったいどんな人々が、何を考えて生きているのだろう。

昔、電車から夕暮れの町をぼんやり眺めているとき、開け放たれた家の窓から、夕食の時間なのか、ふっと家族の団欒が目に入ることがあった。そんなとき、窓の明かりが過ぎ去ってゆくまで見つめたものだった。そして、③胸が締めつけられるような思いが込み上げてくるのである。あれはいったい何だったのだろう。見知らぬ人々が、僕の知らない人生を送っている不思議さだったのかもしれない。同じ時代を生きながら、その人々と決して出会えない悲しさだったのかもしれない。

その集落の写真を見たときの気持ちは、それに似ていた。が、僕はどうしても、④その人々と出会いたいと思ったのである。

写真のキャプションに、村の名前が書かれていた。シシュマレフ村……。この村に手紙を出してみよう。でも誰に。住所は。辞書を開くと、村長に当たる英語が見つかった。住所は、村の名前にアラスカとアメリカを付け加えるしか方法がない。

「あなたの村の写真を本で見ました。訪ねてみたいと思っています。何でもしますので、誰か僕を世話してくれる人はいないでしょうか。……。」

手紙の内容は、それが正直な気持ちだった。初めて書いた英語の手紙は、どんなに拙い文章だったろう。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「手あかにまみれるほど本を読む」とはここではどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア 手あかが付くくらいその本を繰り返し読むこと。
イ 手あかが付かないようにその本を大切に読むこと。
ウ 手あかが付いたもののようにその本に興味を失うこと。

〔　　〕

(2) ――線②「地の果てのような場所」とあるが、この場所の様子が具体的に描かれている一文をこれより前から探し、その最初の三字を答えなさい。

□□□

(3) ――線③「胸が締めつけられるような思い」とあるが、この思いを、「僕」はどのようなものだったと考えているか。二十五字以上三十字以内で二つ探し、その最初と最後の三字を答えなさい。ただし句読点も字数に含む。

□□□～□□□
□□□～□□□

(4) ――線④「その人々」とはどのような人々か。適当なものを選びなさい。

ア 夕暮れの町に暮らす人々。
イ 写真に写った村に暮らす人々。
ウ その集落の写真を撮った人々。

〔　　〕